農村と環境問題

中田　実

一、農村における環境問題の展開と現状

農業の危機のもとで、農業、農家、農村の限りない多様化がすすみ、それらの全体像をとらえることが理論的にも方法的にも困難に

なってきている。そのなかで、これまで主体的にはあまり問題として意識されてこなかった一つの領域が新たに注目を集めてきている。それが農村（あるいは農業）の環境問題である。

社会学については以前からその環境問題へのかかわりの弱さが指摘され、その理由として「資源論の欠落」（園部雅久、一九八一）が挙げられてきた。農村社会学では、当然のことながら農地・山林・水といった資源の所有と利用をめぐって議論が展開され、その限りでは、環境問題と深くかかわってきたということはできよう。しかしそれにもかかわらず、それが環境問題と生々しく切り結んできたかといえばそうではない。すでに環境問題を扱った農村社会学者の先行研究があったにもかかわらず、福武編『戦後日本の農村調査』（一九七七）には「環境」の項目はなかったし、自己批判的にいえば、中田他編の『リーディングス日本の社会学・農村』（一九八六）にすら「環境問題」への配慮はほとんど見られなかったのである。その意味で現在の環境問題への関心の高まりは、従来の視角にたいする反省を含んでいる。それではなぜその変化が生じたのか、また、変化の中身は何だったのか。

第一には、農村は過疎にはなっても環境問題はないと考えられたのが、原生林伐採、林道開設、ゴルフ場やリゾート開発などにより農山漁村の自然環境や資源が急速に破壊されてきたこと、地球規模の環境破壊で農山村でも環境汚染を免れなくなったこと、農山村が都市の廃棄物の捨場となりつつあることなどにより、環境汚染が農村住民にも身にせまる危機として意識され始めたことによる。それとともに、有機農法への注目が一般の農業の環境汚染的性格を浮かびあがらせたことにみられるように、農村＝被害者・善玉という前提自体が崩れ、農業自体が環境にたいして加害者の立場に立つことすら明らかにしてきたのである。第二には、農村（農業）社会学が環境のなかの「資源」にのみ注目してきたことの反省である。対象を「資源」すなわち生産手段とみることはそれを量としてとらえることであり、地域特性は生産力に内包され、その発展によって平準化されるべきものととらえられた。環境の個性的価値は軽視され、開発競争と地域アイデンティティの喪失をまねいていった。農村社会学自体の見直しが求められたのである。

二、アメリカ農村（農業）社会学の場合

この事態は、アメリカ農村（農業）社会学の場合には異なっていた。すでに一九六四年に、アメリカ農村社会学会のなかに自然資源研究集団（NRRG）が生まれ、一九七六年には、アメリカ社会学会のなかに環境社会学部会が設置された（ちなみに、日本社会学会のメンバーで環境社会学研究会が結成されたのは、一九九〇年になってからであった）。アメリカでの農業危機は農業経営の大規模農場への集中と、資本制的生産による農地の土壌浸食にあらわれていた。それだけに、資源問題には切実さがあったのである。

アメリカ農村社会学会五〇周年を記念する総括的研究史（全六冊）のうちの最初の巻はフィールド（D. R. Field）とバーチ（W. R. Burch, Jr.）による『農村社会学と環境』（一九八八）である。本書でフィールドらは、アメリカ農村社会学における自然と社会についての理論の展開として、一九〇〇～一九五〇年の「食糧・原料を得るための自然支配」の時期、一九五〇～一九七五年の「自然についての研究拡大」の時期、一九七五年以降の「自然がパートナー」

となる時期を区分し、「持続的な資源管理」が重要な課題となっていることを述べている。このシリーズの第三冊目は、バッテル（F. H. Buttel）他の『農業の社会学』（一九九〇）であるが、そこでも農業（農村）社会学において闘わされた環境の扱い方をめぐる論争をフォローしている。すなわち、最近の論争としては、環境問題の重視を主張したダンラップ（R. E. Dunlap）とマーチン（K. E. Martin）にたいし、まずコフナウア（C. M. Coughenour）が、それだけではなお不十分で農業生産過程を生物・物理学的環境と結びつけて論ずべきことを提案し、前出のフィールドとジョンソン（D. R. Johnson）は逆に、そのグループの自然資源研究の実績をふまえて、農業社会学では以前から環境を視野にいれてきたと反論している。ダンラップは、フィールドらの意見は環境要因を導入する際の一貫性に欠け、環境問題を軽視するものであると批判している。バッテルらの結論は、エコロジカル・パースペクティブもその内部はなお多様に分化しており、パラダイム内でもパラダイム間でも論争があるということであった。

三、農村と環境問題

さて、農村において環境問題を考察しようとするとき、可能な視角は①環境の客観的特質ないしその変化（例えば、気候、地形、都市との位置関係など）が、そこでの農業（地帯）構造や村落構造をどのように規定しているかを解明すること（それはもちろん環境決定論に戻ることではないが、環境や資源の問題を生産力の問題に解消してしまうのでなく、むしろ地域個性として再評価しようとする視点である）、②今日、多発している農村地域における環境問題について、経済的、法・制度的、社会的、農民意識・運動的側面などから研究すること（伝統的に公害（ないし鉱害）は農山漁村の問題であったし、都市内再開発を除けば、開発はすべて農山漁村の問題として起こるということもできよう）、そして③環境問題の深刻化とともに、それに適切に対応できずにきた従来の学問の方法論から問い直すこと、たとえば「環境問題の社会学的研究」についていえば、当の社会学の方法論自体の批判的検討を行うこと、があろう。キャットン（W. R. Catton）とダンラップのいう「人間例外主義パラダイム」（略称HEP）から「新環境主義パラダイム」（略称NEP）への転換である。以下においては、③にかかわって、農村における環境保全の主体像について若干の検討を行いたい。

農業の展開の過程で、一方で農業経営の専門化と生産品目別の農家集団の形成がすすむとともに、他方で村落の規模の拡大と混住化が加わって、地域統合の弱体化が進行している。このことから、農村地域の環境・資源の保全力が低下し、外部からの環境破壊に無防備な状況を生み出していると考えられる。この事態のなかで、農村の環境・資源を保全しつつ地域の活性化をすすめる主体はどこに見出すことができるのであろうか。

従来、村落の環境・資源保全については、これを村落の機能として理解する議論があった。川本彰の「むらの領域論」はその一つである。川本によれば、村落は人間・領土・作物を保全する機能をもつ。そして、人間保全の内容として「人間環境」の保全が考えられている。むらの領土というときには、その内部にむらびとにより私的に分割された土地を含むが、なおその基底にそれら全体にたいするむらの意思が存在することに注目している。私有による領土（環

境）分割に抵抗する理論として、川本は「総有」をあげているが、「本源的所有」をあげる論者（例えば、鳥越、岩本）も、「共同的記憶」をあげる論者（例えば、嘉田）もいる。歴史的考察においてはいずれも重要な概念であるが、むらの混住化や土地の資産意識が強まるなかでどこまで有効な概念たりうるかという点では疑問なしとしない。むしろ、新たな来住者を含めた農村社会構成員全体の、地域環境保全にたいする共通の合意と、その目的実現のためにそれぞれの層がもつ役割の明確化が必要となっている。先に報告したことのある（年報第二二集、一九八六）志摩漁村の例ではあるが、観光開発にたいする魚協の同意をめぐる魚協内部の対立の経験から、一般にはむらびと全員を組合員とすることの多い魚協ではあるが、このむらでは組合員を真の漁業者に限定して、開発派の非漁民を排除する方向をとってきた。しかし、生活排水（合成洗剤不使用など）や国道拡幅により浜に出る通路が危険となったことにたいして地下道をつけさせる運動など、全住民の協力が求められる問題も次つぎとあらわれてきた。こうして、このむらではあらたに自治会を結成することになり、地域の保全のために重層的な組織体制を整備するにいたっている。その対象は「土地管理」「資源管理」「環境管理」「自然管理」などと区分することができるが、地域としてはこれら全体について「地域共同管理」として担いきることが必要であろう。

環境問題が視野に入れられる時には、その保全のための組織のあり方の検討が求められよう。あわせて自治体や国の役割も明確にされなければならない。農業の維持を環境保全や景観保全と結びつけて全体的に支援する「条件不利地域」を設定したEC農業政策は、その一例として注目しておきたい（津守英夫、一九九一）。

文献

Buttel, F. H. et. al. (1990), *The Sociology of Agriculture*.

Catton, W. R. & R. E. Dunlap, (1978), "Environmental Sociology", *The American Sociologist*, 13−1.

Field, D. R. & W. R. Burch, Jr. (1988), *Rural Sociology and the Environment*.

川本　彰『むらの領域と農業』家の光協会、一九八三。

園部雅久「生態社会学的視座とコミュニティ論」『社会学評論』一二五号　一九八一。

津守英夫「EC統合と農業問題」『科学と思想』八〇号、一九九一。